

幼稚園草創期における文字教育

—フレーベル主義に基づく「置箸法」に着目して—

Literacy Education of Kindergarten in the early Meiji-era:

Focusing on the Froebel's Gift "Stick-Laying"

鈴木 貴史 (帝京科学大学)

Takashi SUZUKI (Teikyo University of Science)

要約： 本研究は、幼稚園草創期（1872-1881）における言葉の領域に着目して、おもに文字教育の実態を探ることを目的としている。本研究の方法として、当時、翻訳された主要な幼児教育論を参照し、言語領域に関するフレーベルの理論が翻訳された際、いかに受容されてきたのかについて検討した。具体的には米国経由で流入したフレーベル主義によってわが国に紹介された「置箸法」に着目し、フレーベルの文字教育との比較検討を行った。その結果、一点目として、幼稚園草創期の幼児教育では、「置箸法」により、小学校への接続を想定した文字教育が行われていたことを確認した。二点目として、「置箸法」は、フレーベルの理論にみられた筆記具を用いて文字を書くことは想定されず、日本語の文字学習としては不適切と見做されるようになったことを確認した。三点目として、表音文字と表語文字を併用する日本語においては、ドイツ語が想定されていたフレーベルの文字教育をそのまま受容することが困難であったことを指摘した。また、当時の幼稚園における文字教育の問題点として、フレーベルの重視した「喜んで活動する *gern tätig sein*」ことを軽視していた点を指摘した。

I. はじめに

本研究は、幼稚園草創期における保育内容の言語領域に着目して、おもに文字教育の実態を探ることを目的としている。本研究における幼稚園草創期とは、1872（明治5）年の「学制」によって「幼稚小学」が規定されてから1876（明治9）年の東京女子師範学校附属幼稚園（以下、「附属幼稚園」）の開設を経て、1881（明治14）年の附属幼稚園による「幼稚園規則」の第三次改訂までを指している。

また、「文字教育」とは、文字を「書くこと」および「読むこと」を指し示しているが、具体的には、「視覚的な通信活動のために言語の視覚的表現として文字の形を実現し、また表された字形連続を言語として理解する能力を開発し学習を助長する支援活動」（林, 1988, pp.822-824）として定義しておくこととする。

幼稚園教育史におけるこの時期の代表的な先行研究である湯川（2001, p.228）によれば、1881（明治14）年に前述の「幼稚園規則」改訂によって幼児教育に「読み方」、「書き方」が明記されたとされる。湯川は、この「読み方」、「書き方」の保

育科目への導入について、「幼稚園では文字の読み書きを教えず、子どもの遊び活動を中心に保育を行うとした創設時の原則を崩すものであり、それはその後の幼稚園教育の在り方に大きな影響を与えることとなった」と述べている¹⁾。

しかし現状として、幼稚園草創期の言語領域における読み書きに関する実態については明らかにされていないため、本研究では、「文字の読み書きを教えず」、「子どもの遊び活動を中心に保育を行う」という「創設時の原則」に着目し、当時の文字教育についての状況を探ることを試みる。

その方法として、当時の主要な幼児教育論である桑田親吾『幼稚園』（1876）、関信三『幼稚園記』（1876）、『幼稚園法二十遊嬉』（1879）などを参照し、わが国に紹介されたフレーベル主義による恩物の一つである、「置箸法」に着目する。「置箸法」とは、短い棒片を用いて作図などを行うことであり、保育科目の呼称として使用される「木箸ノ置キ方」、「箸排へ」、「箸細工」などは、この「置箸法」とほぼ同じ作業を示す語句として捉えられる。本研究は、この「置箸法」とフレーベルの文字教育との比較検討を行いながら、言語領域に関するフレーベルの理論が翻訳された際、いかに受容さ

れてきたのかについて検討する。

II. 「学制」期における幼児教育論の状況

明治初期の幼稚園については、1872（明治5）年の「学制」第22章において「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」と示されている（教育史編纂会、1938、p.282）。ここにおける「小学ニ入ル前ノ端緒」が何を示すかは明らかではないが、湯川（2001、p.83）によれば、これは「学制」のモデルとなったフランスの教育制度における「育幼院」に関する規定に倣ったものであり、「その教育内容も3R'sの教授を含む学校的なものであったことによるのではないかと推察している。

附属幼稚園開設前の1876（明治9）年7月に附属幼稚園の初代監事であった関信三は、『幼稚園記』（全三巻および附録）を著し、幼稚園教育の目的について、下記のように述べている（関、1876、2-3丁）。

大教育師フレデリック、フレベール氏ノ幼稚園ヲ創設セシ原意ハ幼稚入校ノ志ヲ誘引シ且ツ嬉戯歡樂ヲ以テ文学勉強ニ結合シ而シテ又タ身食ニ依テ身体ヲ長養スル如ク意食ヲ以テ心意ヲ長養スルモ亦タ此ノ如ク容易ニ誘導シ得ルトニ三箇ニ過キス乃チ同時ニ良心ノ教育モ亦タ容易ニ開進スルヲ得ヘシ是レ幼齡生徒ノ恒ニ其幸福ヲ甘受スルヲ以テ欣然自ラ学芸ヲ感覚シ他ヨリ故意ニ教化スルヲ要セサルノ地位ニ在ルヲ以テナリ（以下略、傍点：原文）

傍点部に示されているように「嬉戯歡樂ヲ以テ」、小学校以降の「文学勉強ニ結合」することが求められている。

幼稚園草創期のわが国にフレベールの恩物を紹介したものとして、前述の関（1876）よりも前の1876（明治9）年1月に出版された桑田親吾『幼稚園』（全三巻）がある。附属幼稚園の第三代監事であった小西信八は、ここで紹介した二種の理論書について大正期に以下のように回想している（小西、1917、pp.287-288）。

当時であつては幼稚園に関する著書は、僅かに二種を数へたに過ぎなかった、而してそのいづれもがいうまでもなく翻訳書であつた

のである。一つは女子高等師範学校（引用者注：出版時は東京女子師範学校）から出版したので「幼稚園記」といふのであった（中略）

「幼稚園記」と殆んど同じ頃に、文部省から出版されたものに、「幼稚園」といふのがあった。（中略）つまり前の「幼稚園記」とこの「幼稚園」とを併せると、先づ当時に於ては、幼稚園の理論と実際とに通ずることが出来たわけなのである。

この二冊はともに訳書であり、『幼稚園記』の原本が、Douai 著、"The Kindergarten" (1872) であり、そして『幼稚園』の原本は、"A Practical Guide of the English Kindergarten (children's garden)" (1855) である（岡田、1977、pp.20-22, p.34）。

フレーベルがその著書において提示した遊具（Gabe, gift, 恩物）は、6種類であったが、米国を経由してわが国に流入したフレーベル主義の理論を翻訳した際、作業（occupation）と恩物をまとめて「二十恩物」として紹介された（湯川、2001、pp.172-190）。

このように、幼稚園草創期における幼児教育論は、フレーベルの直訳ではなく、英語圏を経由して日本に流入したという特徴がある。そのため、フレーベルの理論をそのまま受容したのではなく、恩物の解釈についても、英語圏のフレーベル主義の影響を強く受けることになったのである²⁾。

「学制」で規定されたものの実態を伴わなかった幼稚園は、1876（明治9）年11月の東京女子師範学校附属幼稚園の開設をもって、女子教育の一環として始まった。湯川（2001、pp.212-217）は、附属幼稚園開設後の保育内容について、最初の1877（明治10）年の「幼稚園規則」より前の1876（明治9）年11月の段階で仮定の幼稚園規則があったことを紹介している。ここで示された「保育規則」の第三条では、「遊戯、運動、談話、唱歌、開誘」の保育科目が掲げられている。言語領域に関連する項目を挙げれば、「修身ノ話」、「話シ」、「詩ノ誦（ソラヨミ）」などがある。「開誘」とは、「建方」「箸細工」、「画」、「紙織」など恩物による教育である。

その後、1877（明治10）年7月の「東京女子師範学校附属幼稚園規則」（以下「幼稚園規則」）では、「保育科目」として、「物品科」、「美麗科」、「知識科」の三領域が示された。さらに、「三科包有スル所ノ子目」として、「五彩球ノ遊ヒ、三形物ノ理

解、貝ノ遊ヒ、鎖ノ連接、形体ノ積ミ方、形体ノ置キ方、木箸ノ置キ方、環ノ置キ方、剪紙、剪紙貼付、針画、縫画、石盤図画、織紙、畳紙、木箸細工、粘土細工、木片ノ組ミ方、紙片ノ組ミ方、計数、博物理解、唱歌、説話、体操、遊戯」の25種を挙げている（日本保育学会、1968、pp.92-96）。

「第三ノ組」（年少期）、「第二ノ組」（年中期）の「木箸ノ置キ方」では、年少では「六本ニ至ル」、年中では「六本ヨリ二十本ニ至ル」のように、使用する木箸の数がそれぞれ示されているのみである。これに対して、満五年以上満六年以下の「第一ノ組」（年長期）の「保育時間表」では、「木箸細工」と名称が変わり、「木箸ヲ折りテ四分ノ一以下分数ノ理ヲ知ラシメ或ハ文字及ビ数字ヲ作ル」とされている。つまり、草創期の「木箸細工」では、傍点部のように木箸を用いて文字を作成することが想定されていたのである。

その後、附属幼稚園における「幼稚園規則」は、1877（明治10）年10月の第一次改訂、1878（明治11）年2月の第二次改訂までは微細な変更にとどまり、保育内容については開設時の方針が継承された。

以上みてきたように、「学制」期の幼児教育では、フレーベル主義に基づき「嬉戯歓楽ヲ以テ」教育することが求められてはいたものの、小学校以降の「文学勉強ニ結合」するよう文字教育の初歩が求められていたことを確認することができる。

Ⅲ. フレーベルの文字教育

ここでは、フレーベルによる文字教育について確認しておきたい。フレーベル（1981）の第18章「リナはどのようにして読み書きを覚えるか（原題：Wie Lina schreiben und lesen lernt）」（以下、「リナ」）において、およそ6歳の少女の例を用いて読み書きの習得について述べている³⁾。

リナ「ねえお母さん！小さい紙をちょうだい。
ねえ！お母さん！リナもお父さんのよう
にお手紙を書くんだから」

母「リナはまだお父さんのようには書けませんよ。それに紙に書くななんてなおさらよ！リナのこの小さなお指はまだまだ弱くって、上手にペンや鉛筆を持ったり動かしたりできませんよ。でもね、お母さんは小さな棒片でリナがどんなにして字

や言葉を並べられるか、まあとにかくリナが書きたいと思うことや書くことができることは、書けるように教えてあげましょうね」

こうした会話からまず母親は、棒片を並べることににより、名前の表記をすることを教授する。

ここでは、二つのことを押さえておかなければならない。それは、リナがすでに「簡単な玩具でいろいろなものをつくりあげることができた」、「立方体や直方体の積木でたくさんのきれいなものを組み立てたり、形や色の違った板片や棒片などでたくさんの美しいものを並べたりできた」とあるように、恩物を自由に使いこなせる発達段階にあったことである（フレーベル、1981、p.556）。リナがこうした発達段階にあることを前提の上で、傍点部にあるように文字を書くのではなく、棒片を並べることから始めるのである。

二つめに、傍点部の「リナが書きたいと思うことや書くことができること」にあるように、リナに対する文字教育が、「読み書きを覚えたいという衝動」（フレーベル、1981、p.628）に基づいていることである。フレーベル（1981）において、この章の副題が「いつも喜んで活動したがる子どもたちのための美しい物語（原題：Eine schöne Geschichte für Kinder, die gern thätig sind）」⁴⁾であるように、「喜んで活動する gern tätig sein」ことが強調されている。

母「だけどね、わたしたちがもし名前を書く時には——いまはまだ棒片を並べるだけですけれど——まず初めにそれを正しく正確に聞いて、そしてその名前のなかで気のついた音や響きの違いによく注意しなければなりません。それからこれらの音や響きをあらわす符号や文字を覚えなければなりません。つづいてリナの名前のつづりのなかにある音や響きを、聞いたとおりに正しく文字に並べなければなりません。」

このように、リナがもっとも興味をもてる語句である自分の名前から学習を開始する。母親は、書くためにはまず正しく聞くことを要求する。その上で、音をあらわす符号として文字を覚えるという手順を提示している。

具体的には、まずは「LINA」の文字を提示し、リナが「L[l]—i[i:]—n[n]—a[a:]」と発音した後、母親は、母音の文字である「i」と「a」を取り出して「i:]—[a:]と発音した後に字形の学習に移る。音声と文字を結合させる教授法は次のようなものである。

母「この棒片がこんなふうに —棒片をさし示す— 置いてある時はいつでもiという音の符号ですよ。」

このように棒片を組み合わせてアルファベットの字形を学習し、それぞれの文字に対応する音声を習得する。「R」,「P」,「D」,「O」のように曲線を含むものは、指で棒を曲げて弓形にして字形を作るとされている。単音と字形が結びついたら、「Li」,「na」の音節の練習に移るのである。

ドイツ語では、アルファベット一文字の発音と綴ったときの発音に差異が少ないため、こうした単音ごとに発音学習をした後に字形の学習を行い、その発音学習をそのまま生かして音節の学習を経て、綴った単語「Lina」の発音[li:na:]へと進むことが可能である。

一方で、英語のアルファベットの読み方では、「i」の発音は[ai]、「a」は[ei]であり、これを「Lina」と綴ったときには発音が変化し、それぞれ[i]と[a]となる。ドイツ語と英語ではこうした言語の相違があるため、フレーベルの教授法をそのまま適用することは困難である。

また、アルファベットと同様にわが国の仮名文字も表音文字であるが、ドイツ語とは事情が大きく異なる。それは、子音または母音のいずれかの音を表す単音文字のアルファベットと異なり、仮名文字は子音と母音を含む音節文字であるため、まず文字とこれに対応する音を一致させ、はじめから子音と母音を組み合わせて音節の学習へと導く必要がある。

このように、フレーベルの文字教育は、筆記具を使用することが困難な初歩の段階では、棒片で文字をつくり、それを発音することを繰り返すのである。その後、「Mutter (母)」,「Vater (父)」,などのリナにとって身近な単語を学習し、さらに「Lieb (愛する)」や「Oheim (叔父)」などを用いて、通常のアルファベットの発音と異なる例外的な発音「IE [i:]」,「EI [ai]」も習得する。その後、手紙で使用する語句まで発展させ、これを読むこ

とができるようになる。

このように単音、字形、音節、単語の学習を徹底的行ったうえで、はじめて石筆と石盤を用いてラテン文字による父親に宛てた手紙を書くことに挑戦するのである。リナがはじめて書いた手紙は以下の内容である。

LIEBER VATER, KOMME DOCH BALD
WIEDER. ICH KANN SHON AUF DIE
TAFEL SCHREIBEN.

DEINE LINA

(訳) あいするおとうさん どうぞはやくかえっててください。わたしはもうせきばんのうえにかくことができます。
あなたの娘リナより

この手紙に対して、以下のような父からの返信を受け取る。

LIEBE LINA!

DEIN BRIEFCHEN HAT MIR VIEL
FREUDE GEMACHT, ABER KOMMEN
KANN ICH JETZT NOCH NICHT,
WARUM? —WIRD DIR DIE LIEBE
MUTTER SAGEN. MIR DAGEGEN
MACHE DIE FREUDE UND SCHREIBE
RECHT BALD WIEDER.

DEIN DICH LIEBENDER VATER.

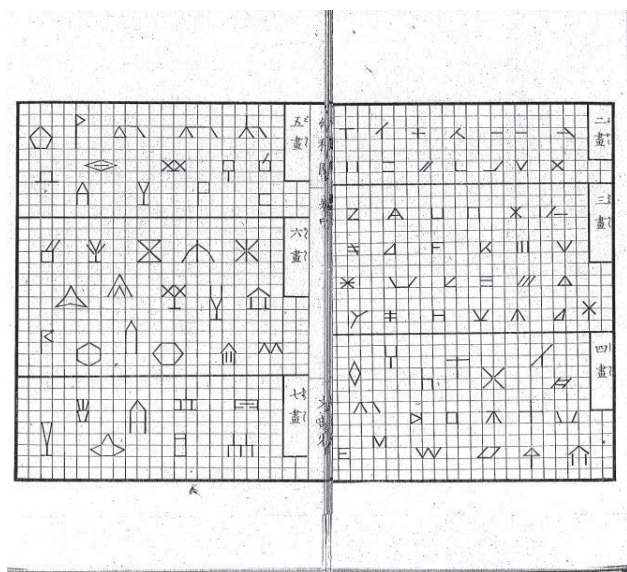
(訳) リナちゃん

お前の手紙を受け取ってほんとうにうれしかったよ。しかしお父さんはすぐには帰れません。なぜでしょうか。そのわけはお母さんが話してくれるでしょう。そのかわりにまた書いて喜ばせておくれ。
お前を愛する父より。

この父親の手紙で使用されていないアルファベットは、変母音（ウムラウトを伴う「Ä Ü Ö」）を除き、「P」,「Q」,「X」,「Y」と「ß (エスツェット)」である。ドイツ語では「Q」,「X」,「Y」の使用頻度が低いことを考えれば、この短い手紙でアルファベットを網羅的に扱っているといえる。また、二文字以上で構成される例外的な読み方についても、波線部で示したように、「IE [i:]」,「EI

このようにペスタロッチにとって文字を書くことは図形描画の延長であった。フレーベルにおいてもこうした棒片を用いて形をつくり、文字を認識していく方法が採用され、文字と図形の学習を関連づけて学習する方法が採用されたのである。

ここでは、最初は棒片一本使用する作業からはじめて、直線から徐々に複雑な図形を作成していくという作業が例示されている(図1)。二画に片仮名の「イ」や漢字の「人」のような形を見出すことができるが、ここでの作業の目的は、図形を作成することに主眼が置かれていたものと推察さ



ここでは、歴史的仮名遣いに力点が置かれており、さらには身近な物の名前やの仮名や、数字など日常使用する漢字の学習まで想定している。たとえば、「キヌ」、「イト」を箸並べによって作成し、これをそれぞれ幼児に発音させる。さらに、これらを結合して「きぬいと」とし、「きぬ」を「あさ」に入れ替えて、「あさいと」などへ発展させる方法が説明されている。

桑田（1877）に図示されている「片仮名および単語」には、箸並べによって直線のみで形づくられたいろは順の片仮名のすべてが表記されている。つぎに単語（図2）では、「イト」、「イヌ」などの片仮名表記の単語に「糸」、「犬」などの漢字を手書きで併記している。傍点部にあるように、こうした学習が小学校との接続に有効であるとの考え

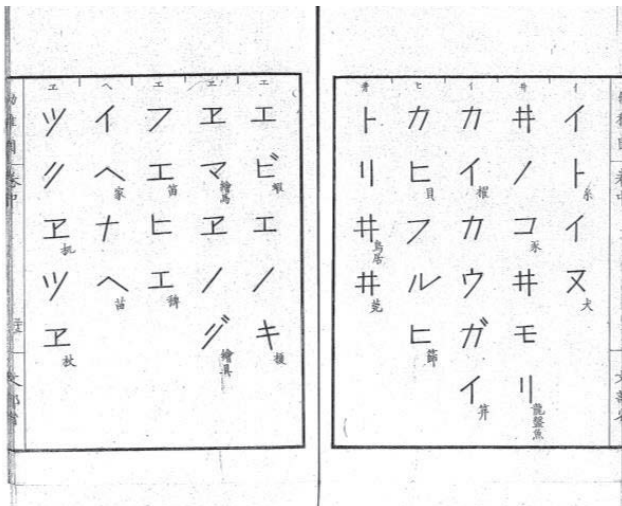


図2 桑田親吾『幼稚園 巻中』, 32-33丁

が示されている。

ここでは、前述のとおり、「イト（糸）」と「イモリ（イモリ）」、「カイ（樺）」と「カヒ（貝）」のように、当時の歴史的仮名遣いの理解に力を注いでおり、小学校の教科書である1875（明治8）年の『小学入門』などと同様である（鈴木, 2016a）。

このように、歴史的仮名遣いでは、同じ発音「イ[i]」であっても「イ」、「ヒ」、「キ」のように使用する文字が異なる場合や、反対に同じ文字「ヒ」であっても、「ヒ[ç]」と「イ[i]」のように異なる発音で読む場合があり表音文字としては不規則である。さらに、「棒細工」によって、通常の平仮名、これを複雑にした変体仮名の字形を表記することはほぼ不可能であったと考えられ、ここには掲載されていない。このように、日本語は表音文

字にも数種類あり、さらに表語文字である漢字を併用するため、ドイツ語のように文字と単音を単純に対応させることが困難であった。

そのため、「リナ」で示されたドイツ語の学習のようにアルファベットの単音と文字を対応させ、これを綴り字にしてさらに音声による問答教授によって学習する方法はわが国ではそのまま導入することが難しかったのである（鈴木, 2016a）。

これまでみてきたように、桑田（1877）で示された「箸細工」は、図形を作成した後、文字の作成へと発展させるような記述であった。しかし、その原本である、Ronge（1855, p.43）における、「LAYING STICKS」では、はじめに棒片を一本使用するものから例示され、十本使用するものに至る。ここで、「Two Sticks」の欄に二画の図形とともに「V」、「T」の文字を示し、「Three Sticks」の欄に三画の図形とともに「H」、「F」、「K」、「Z」、「A」などの文字が示されている。このように、画数（棒片の数）ごとに図形に文字も含めて掲載さ



図3 Ronge (1855, p.43)

れている。

つまり、桑田（1877）が図形の後で、いろは順

に片仮名を掲載していたのに対して、Ronge (1855) では、アルファベット順ではなく、画数の少ない文字から多い文字へ、すなわち易から難へという配列がなされていた。こうした配列は、当時の筆記体書法と同様であった(鈴木, 2016b)。これに加えて、桑田(1877)がこの「箸細工」によってすべての片仮名を掲載していたのに対して、Ronge (1855) では、すべてのアルファベットを掲載していないことが挙げられる。この点からも、わが国の「置箸法」が幼児教育における図形学習ではなく、文字学習の導入として強く意識されていたことが確認できる。

桑田(1877)では、文字の形状を示し、歴史的仮名遣いによる片仮名表記により読み方と結びつけて学習するだけではなく、図4に示すように、「棒細工」による漢字の作成例が読み方とともに数多く提示されている。しかし、「火」や「乙」に代表されるように、正確に字形を表しているとはいえず、毛筆が実用であった当時の文字学習としては不十分と受け止められたことは容易に想像

p.288)。

それから「箸ならべ」といふ遊戯の説明に、原著(引用者注: 桑田, 1877)に於て箸を並べてABC等の文字を作るやうになってゐるのに従って、この訳書には箸を並べて片仮名を作らせるやうになってゐる(引用者注: 図1)、それだけならば原著の主旨を適用したのであるから差支ないのであるが、この訳書には仮名を一通り習はした後に尚漢字を「箸ならべ」によって習はしめやうと企て、あるのである(引用者注: 図4)、これなどは、幼稚園教育の主旨が徹底してゐなかつた創始時代とはいへ、可なり無考へな試みであつたと思ふのである。

小西が徹底されていなかったと述べる傍点部の「幼稚園教育の主旨」が何を示しているのか定かではないが、少なくとも小西は、発達段階等を踏まえて幼稚園で片仮名を扱うことは問題ないが、漢字を教授することは問題があると考えていたことだけは確実である。

さらにこの時期、関(1879)によって、フレーベルの恩物は、「二十恩物」として紹介されている。この関(1879)も、前述の桑田(1877)、関(1877)と同様に英語圏からの翻訳本であり、原本は、Shirreff. 著, "Essays and Lectures on the Kindergarten"(1883)であるとされている(岡田, 1977, p.56)⁵⁾。

ここでは、桑田(1877)「箸細工」が、「第八恩物 置箸法」として紹介されている(図5)。その作業の説明として、「この恩物は長短五種の細き木箸なり」、「幼稚園に於てはこの木箸の若干個を保

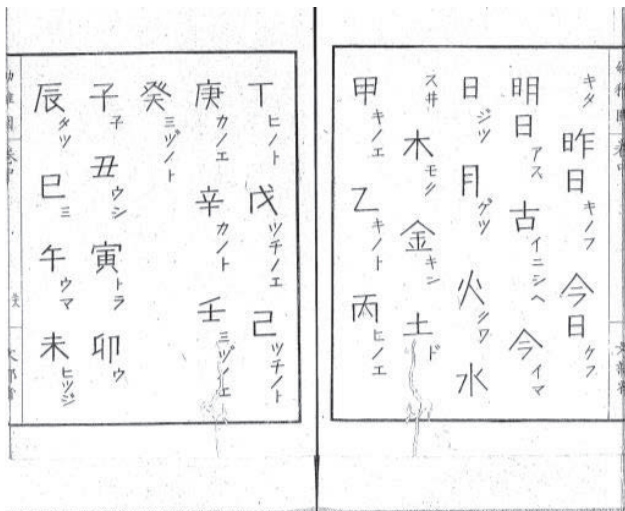


図4 桑田親吾『幼稚園 巻中』, 37-38丁

できる。

1879(明治12)年に関信三が急逝し、二代目監事の神津専三郎を経て1881(明治14)年7月に前述の小西信八が第三代監事に就任する。小西は、それまで女子師範学校助教諭であった。

小西の回顧録によれば、当時の附属幼稚園で「置箸法」(当時の名称は、「箸ならべ」)は単なる理論上の保育内容というだけではなく、文字教育の一環として実践されていた。この「置箸法」について、以下のように述べている(小西, 1917,



図5 関信三『幼稚園法二十遊嬉』, 11丁

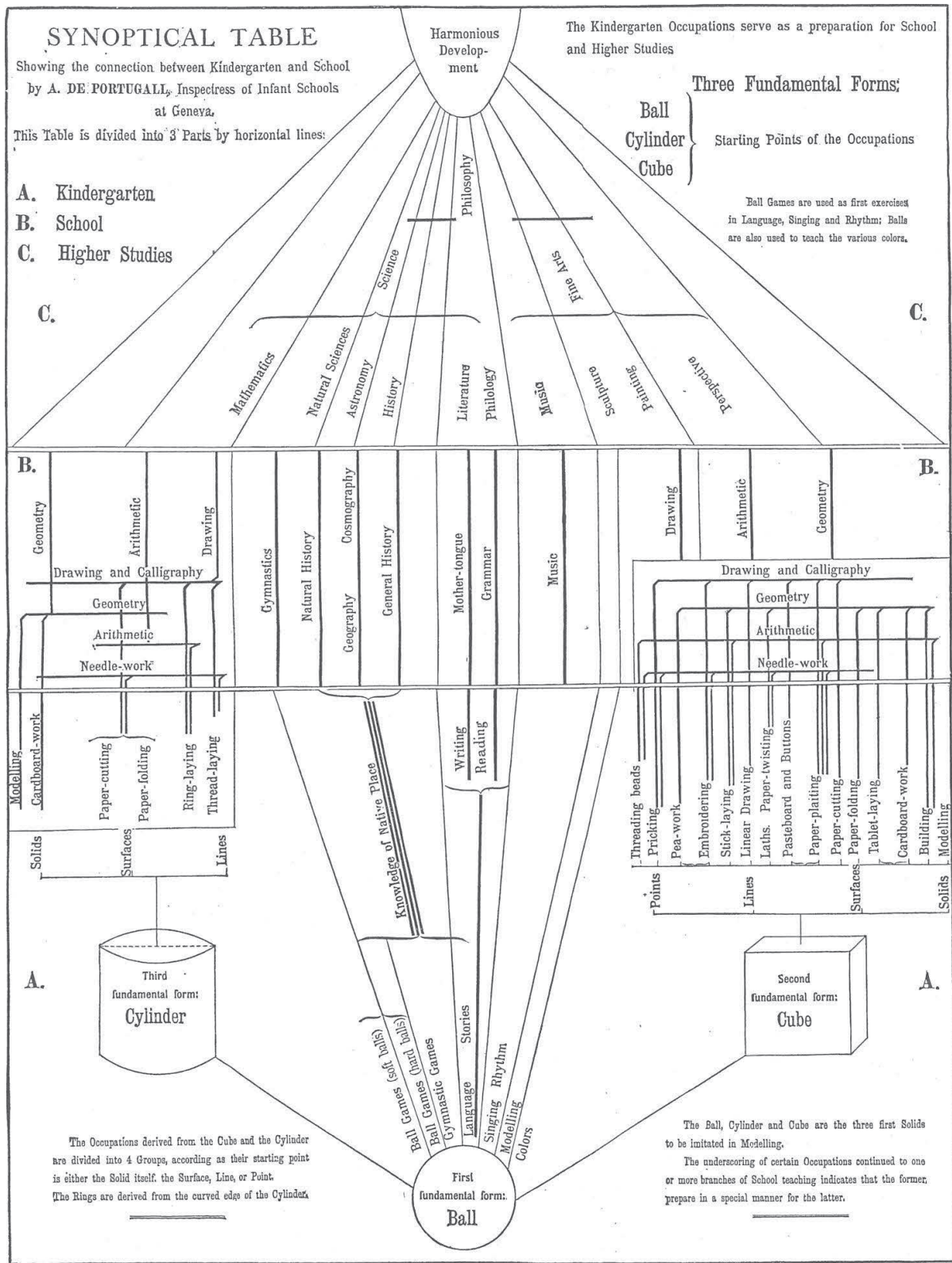


図6 “Synoptical Table”, Shirreff (1883)

姆の指図に随て函の中に取り出し之を卓子の上に組
置以て種々の物形を造らしむ」とある。

また、補足として、「布列別（フレベル）氏は之

を手探絵と名（づ）け第十恩物図画法の最上予備
門とす」,「又幼児に之を授け以て実際に乗算の法
を知らしめ或は数字片仮名文字等を習はしむるも

敢て難き業にあらず」とあり、ここでも図形描画との関連は示されているものの、わが国では文字学習の一環として捉えられていることが確認できる。

原本とされる Shirreff (1883) の“THE TENTH GIFT. The sticks”を参照すると、“The sticks, like most of the preceding Gifts, intended to teach numerical proportion and variety form.”とあり、「置箸法」は、数学的な図形の学習の準備として位置づけられている。文字も形 (form) に含めて捉えられていると考えられるため、文字については図示するのみで説明に関する記述を見出すことはできない。また、この Shirreff (1883) では、冒頭に「Synoptical Table」として、幼稚園から上級学校までの教育内容の系統図を掲載している (図6)。ここでは、最下部の三つの図形によって、「First fundamental form(Ball)」、「Second fundamental form (Cube)」、「Third fundamental form (Cylinder)」という幼児教育における三つの原則が示され、ここから上級学校に向けて教育内容が分岐していくとされている。図中央部の「Writing」や「Reading」などの言語領域の項目が、中央下部から“Ball—Language—Stories—Writing・Reading”と発展していく流れに位置づけられているのに対して、「Stick-laying」は、この言語領域に系統に含まれておらず、右下部の「Cube—Stick-laying—Arithmetic・Geometry」という数学の系統に位置づけられている。このように、文字を図形の一部として捉える欧米の文字教育の考え方は、数学的な図形の系統に属していると捉えられている。すなわち、米国からわが国に流入したフレーベル主義の理論においては、「置箸法」は、「リナ」にみられたような筆記具を用いて文字を書くことにつながる学習とは捉えられておらず、こうした記述は、英語圏の原典においても除外されていたのである。

こうしてわが国において、英語圏からフレーベル主義が流入した際、関 (1879) で紹介された「第八恩物 置箸法」は、第十恩物「図画法」の初歩になることが示されただけでなく、文字教育の一環として紹介された。

しかしながら、日本語における文字教育という視点からみた筆記具を使用しない「置箸法」は、曲線を作成することが困難であったため、平仮名や漢字を十分に表現できないことに限界があったといえる。これに加えて、毛筆が実用的筆記具で

あった当時では、「止め・はね・払い」を正確に表現することができないことでも文字教育としての不適当と考えられたと推察される。

V. 小西信八による「幼稚園規則」第三次改訂

前節で紹介した小西の回顧は、自身の文字教育観に基づき、幼児に文字を教えることを否定しているのではなく、「置箸法」によって漢字教育を行うことを否定している。以下に小西の回顧録から監事時代の小西の文字教育に対する考えを探ってみよう。

附属幼稚園では、第三代監事の小西のもとで行われた二回の「幼稚園規則」の改訂のうち、最初の1881 (明治14) 年6月の第三次改訂において、初めて保育課程に「読み方」、「書き方」の語句が登場する (日本保育学会, 1968, pp.96-100)。その第三次改訂で示された「保育科目」の「箸排へ」、「読み方」、「書き方」については以下の通りである。

「六 箸排へ 箸排へハ大約一寸ヨリ五寸迄ノ五種ノ細長キ箸ヲ与ヘテ門、梯、家、机等の輪郭ヲ排ヘシメ以テ工夫ノ力ヲ養フヲ主トシ兼テ長短ノ觀念ヲ得シム」

「十七 読み方 読み方ハ始ニハ片仮名ヲ以テ幼児ノ知リタルモノノ名等ノ綴リ方易キモノヲ黑板ニ書キ示シテ仮名ノ称ヘ方用ヒ方ヲ教フル旨トシ後ニハ仮名ヲ記セル骨牌ヲ以テ物ノ名等ヲ綴ラシム」

「十八 書き方 書き方ハ片仮名、平仮名ヲ以テ既ニ授ケタル物ノ名等ヲ黑板ニ書キ示シテ石盤ノ上ニ習ハシメ又数字ヲ習ハシム」

まず、「六 箸排へ」については、ここに文字教育に関する記述を見出すことはできない。さらに「十七 読み方」については、傍点部に示したように、「黑板ニ書キ示」したり、「骨牌 (カルタ)」の使用が提示されている。また、「十八 書き方」では、幼児教育において、初めて石筆石盤を用いて文字を書くことが提示された。

小西の時代に石筆を用いて文字を書くことを導入したという事実については、前述の回顧録からも確認することができる。小西 (1917, pp.292-293) は、監事時代を振り返り、「幼稚園と小学校との連

絡問題」を解決するため、「附属小学校の最下級と幼稚園の最上級とを一緒に纏めて」、「小学校の一年級と幼稚園の上の級とを一つにしてしまった」と述べている。ここで「書き方」の状況について「それがために幼稚園の上の級へ行くと幼児は片仮名を習ひ始めることになったと同時に小学校の一年生は又「かみたゝみ」や何かをすることゝなった」と振り返っている。

この小西の記述から、幼児が石筆を使用して文字を書くことについては、小西の監事時代に開始されたとみて間違いないのであろう。これを導入した理由について、小西は、「多くの父兄から幼稚園は何も教へて貰はぬといふ不平」があったことにより、「片仮名だけ教へようといふ、その為に級をふやし」たと回顧している（小西、1929, p.22）。

この小西の回顧録では、当時、附属幼稚園に通っていた文部次官の辻信次の子弟などが幼稚園を終えてから私設の小学校で読み書きを学習していたと述べている。このように、年長児に文字教育を行うことについては、貝原（1961）で記されているように近世以来、毛筆による手習い教育の学習開始時期が数え年の6、7歳とされていたことを鑑みれば、満5歳の年長児の教育で石筆の読み書きの教育を行うことに違和感はなかったものと考えられる。

とはいえ、小西の文字教育は、決して保護者の要請だけに由来するのではなく、小西の文字教育観に基づくものでもあった。小西は、「幼稚園の言葉が漢字ではいかんと思ふ」と述べて以下のような用語の変換について語っている（小西、1930, pp.30-31）。

西洋ではABCはお母さんが使ふ言葉だからよいが、織紙だの、図画だのと、日本のお母さんが使ふ言葉ではない。紙きり、紙たゝみ、書き方といふ風にした方がよいと思ふて、やはらかい名に代へました。排板、排環、排箸などといつては子供には分りやしません。

ここにみられるように、幼稚園で使用する語句を易しい表現に改めている。また、仮名を重視する理由として以下のように述べている。

私はカタカナキチガヒと云はれますが、むづかしい漢字を学ぶために、吾々は何れだけ損をし間違ひを起こし、迷惑をするか知れないと思ふて明

治五六年頃からカナの会を起しました（以下、略）

小西は読み書きの学習を平易にする目的から、漢字を廃止し、発音式仮名遣いを用いるように主張していた（湯川、1986, pp.77-78）。小西は、後にフレーベルの伝記を記していたように、フレーベルの文字教育を理解したうえで、ドイツ語と同様の表音文字による文字教育を目指した可能性が考えられる。このような視点に立てば、小西はフレーベルの「リナ」にみられるように石筆による文字教育まで発展させることを想定していたと考えられ、「置箸法」による漢字教育を否定して表音文字の仮名だけに限定したことや、さらには、第三次改訂において「書き方」を導入したことも理解することが可能である。

しかしながら、小西による第三次改訂における文字教育とフレーベルとの決定的な相違点は「幼稚園規則」の「保育ノ要旨」の記述に見出すことができる（日本保育学会、1968, pp.96-97）。

諸課ノ開誘ハ敏捷活発ニシテ幼児ヲシテ倦マサラシメス務メテ問ヲ設ケ其觀察注意ヲ起シ事物ノ觀念ヲ得シメ応答ニヨリテ言語ヲ習ハシメ且幼児自己ノ工夫ニヨリテ成ルヘキモノハ唯其端緒ヲ示シテ幼児ノ工夫ヲ促シ自ラ成スノ良ヲ養フヘシ、（中略）又保育課中数ヘ方読ミ方等心意ノ勞ヲ要スルモノハ之ヲ時間ノ始メニ置キ豆細工、紙織リ、紙摺ミ等ノ心目ヲ楽シマシムルモノハ之ヲ時間ノ終ニ置キ（中略）以テ其鬱屈ヲ暢開センコトヲ要ス

ここでは、「読ミ方」「書き方」が「リナ」で示されていた幼児の「読み書きを覚えたいという衝動」に基づくのではなく、「心意ノ勞ヲ要ス」ものとされ、幼児の負担となる活動として捉えられている。さらに、その負担を補うべく、幼児が楽しめる他の活動によって「其鬱屈ヲ暢開センコトヲ要ス」とされている。

たしかに小西による第三次改訂は、従来の「置箸法」による文字教育にとどまるのではなく、フレーベルの理論を部分的に理解し、「リナ」のように片仮名に限定して石筆まで発展させることを目指していたのだといえる。しかしながら、小西の文字教育は、フレーベルの強調していた「喜んで活動する gern tätig sein」ことを軽視していた点に問題があったのである。

VI. おわりに

本研究は、草創期の幼稚園における文字教育について「置箸法」を中心として探ってきた。本研究の成果として得られた結論は以下の三点である。

一点目として、幼稚園草創期の幼児教育では、フレーベル主義に基づき「嬉戯歓楽ヲ以テ」教育することが求められてはいたものの、小学校以降に接続するための文字教育の初歩が求められていたことを確認した。

保育科目の名称としての「書キ方」「読ミ方」の保育については、1881（明治14）年に小西が導入したといえるが、「置箸法」にみられたように、草創期の幼稚園では小学校への接続を想定し、文字教育が行われていたのである。

二点目として、わが国に紹介された恩物の一つである「置箸法」によって幼稚園草創期から文字教育が行われていたことを確認した。「置箸法」は図形教育としてだけではなく、これを発展させた文字教育の一環として紹介され、片仮名だけでなく漢字教育まで想定されていたことを確認した。文字教育を行うことは、フレーベルの「リナ」で紹介された方法ではあったが、附属幼稚園で考えられた方法は、幼児教育としては難易度が高く、文字の種類の多い日本語の文字教育としても不適切であったと見做されていたことを確認した。

三点目として、わが国の受容した幼児教育論では、フレーベルの「リナ」にみられた筆記具を用いて文字を書くことが想定されていなかったという点を挙げることができる。これは、当時の幼児教育論がドイツ語とは異なる英米語圏のフレーベル主義の流入であったことが理由の一つであることに言及した。さらに、表音文字と表語文字を併用する日本語の教育においては、ドイツ語による音声と文字を対応させる教授法がさらに困難であったことを指摘した。

このように、わが国の幼稚園草創期における文字教育は、「置箸法」によって行われていた。ただし、本来のフレーベルの幼児教育論との相違は、「リナ」でみられたように石筆によって文字を書くことにまでは至らなかった点にある。先行研究で指摘されていた、小西による第三次改訂における「読ミ方」「書キ方」の導入については、それまで行われていた「置箸法」による文字教育に加えて、石筆による文字教育を開始したという点を押さえておかなければならない。ここだけ捉えれば、小

西は、部分的には「リナ」に基づくフレーベルの思想を理解して文字教育を推進しようとしたとも言える。

最後に、本研究で確認してきた「置箸法」や小西による「読ミ方」「書キ方」を踏まえて幼稚園草創期の文字教育の問題点を指摘しておきたい。

一点目は、ドイツ語との言語の相違が十分に検討されていない点である。フレーベルの「リナ」は、音声と文字を対応させ、綴り、読みを経て書くことを教えていく方法であった。単音文字のアルファベットを用いるドイツ語は、表音文字として発音の例外が少ない言語であるが、表音文字であっても音節文字で複雑な仮名遣いを伴う日本語では、そのままの方法を用いることは困難であった。小西が安易に表音仮名遣いを推進していくのは、こうした言語の相違に関する検討が不十分であったことに起因するであろう。

二点目は、V節で指摘したように、当時の幼稚園における文字教育とフレーベルの相違点は、幼児の「読み書きを覚えたいという衝動」に基づいていなかったという点にある。フレーベルの幼児教育論に沿うことを重視するならば、このような「喜んで活動する *gern tätig sein*」ことを軽視した文字教育を行うことは避けなければならない。

本研究で検討した第三次改訂の「幼稚園規則」は、「以後の多くの幼稚園の基準」となっているとされているように、その文字教育の方針も1884（明治17）年2月の第四次改訂にも継承された（湯川、pp.228-229）。この「読ミ方」「書キ方」が削除される1891（明治24）年までの動向については稿を改めたい。

謝辞

本研究の一部は科学研究費（基盤研究C：17K04648「明治大正期における言語領域を中心とした幼児教育の意義の再検討」）の助成を受けている。

注

- 1) 本論文の引用部における傍点は、すべて引用者によるものであり、原文の傍点については別記する
- 2) フレーベルの翻訳本は、A.L.ハウによる1897（明治30）年の『母の遊戯および育児歌』、1909（明治42）年の『人の教育』まで俟たなければならない。

- 3) 原題は, Fröbel (1966) に依拠している.
- 4) *thätig* は, *tätig* のことを指していると推測できる.
- 5) 原本の Shirreff (1883) では, 20 の恩物ではなく, 13 恩物 (gifts) と 7 の活動 (occupations) である.

参考文献

- フレーベル, 莊司雅子訳 (1981). 『フレーベル全集 第4巻 幼稚園教育学』. 東京: 玉川大学出版.
- Fröbel, F (1966). *Pädagogik des Kindergartens*. In W. Lange (Ed), *Friedrich Fröbel's gesammelte paedagogische Schriften*. Osnabrück: Biblio.
- 林 大 (1988). 「文字教育」, 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』. 東京: 明治図書.
- 飯島半十郎 (1855). 『幼稚知恵のみちひき 巻の上』. 東京: 修静館.
- 貝原益軒 (1961). 『和俗童子訓』. 東京: 岩波書店.
- 小西信八 (1917). 「本邦幼稚園の発生時代」『婦人と子ども』17 (8), 287-294.
- 小西信八 (1929). 「私の監事時代」『幼児の教育』29 (1), 20-23.
- 小西信八 (1930). 「昔がたり」『幼児の教育』30 (4), 28-31.
- 桑田親吾 (1877). 『幼稚園 巻中』. 東京: 文部省.
- 教育史編纂会 (1938). 『明治以降教育制度発達史 第一巻』. 東京: 龍吟社.
- 日本保育学会 (1968). 『日本幼児保育史 第一巻』. 東京: フレーベル館.
- 岡田正章 (1977). 「「幼稚園」解説」「幼稚園記」解説, 岡田正章監修『明治保育文献集 別巻』. 東京: 日本らいぶらり.
- ペスタロッチャー, 長田新訳 (1960). 『ペスタロッチャー全集 第八巻 ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』. 東京: 平凡社.
- Ronge, J & Ronge, B (1855). *A Practical Guide to the English Kindergarten (children's garden), for the use of Mothers, Nurses, and Infant Teachers: being an Exposition of Froebel's System of Infant Training*. London: J.S.Hodoson.
- 関信三 (1877). 『幼稚園記』. 東京: 東京女子師範学校.
- 関信三 (1879). 『幼稚園法二十遊嬉』. 東京: 青山堂.
- Shirreff, E (1883). *Essays and Lectures on the Kindergarten: Principles of Froebel's System*. New York: E. Steiger.
- 鈴木貴史 (2016a). 「明治初期の教授法における文字および書字の機能－文字言語と音声言語の関係に注目して－」『筑波大学教育学系論集』第40巻第2号, 57-67.
- 鈴木貴史 (2016b). スペンセリアン・ペンマンシップにおける筆記体小文字書法 ―明治期におけるわが国の書字教育への影響に関する基礎資料として―『帝京科学大学教職指導研究』第2巻第1号, 9-16.
- 湯川嘉津美 (1986). 「小西信八の幼稚園認識」『日本ペスタロッチャー・フレーベル学会紀要 人間教育の探究』創刊号, 75-90.
- 湯川嘉津美 (2001). 『日本幼稚園成立史の研究』. 東京: 風間書房.